

## 特集にあたって

### 日中戦争期における対日協力の諸側面

対日協力政権は久しく「傀儡政権」と呼ばれ、「汚物」であり「唾棄すべきもの」という「評価」とともにあった。これは、冷戦の終結に伴うイデオロギーの呪縛や革命史観からの解放が進んでいる現在でも、完全に払拭されているとは言いがたい。これは、National History やそれが由来する Nationalism に国家の枠組みを依存し続けて居る現在の世界では、なお一般的な「理解」あるいは「見方」なのかもしれない。

しかし、近年、イデオロギーや革命史観から解放される中で急速に進展しつつある分野に、日中戦争研究のなかで重要な位置を占める対日協力政権研究がある。これは、John Hunter Boyle “China and Japan at War 1937-1945 The Politics of Collaboration” (1972) に始まると言ってよいであろう。しかも、Boyle の提唱した Collaboration 概念を活用してヴィシー政権論を新たな地平に引き上げたのが Robert O. Paxton “La France de Vichy” (1973) (邦訳『ヴィシー時代のフランス—対独協力と国民革命 1940-1944』(2004)) であり、Paxton はフランスにおけるドイツ占領地域での対独協力、すなわちヴィシー政権を再検討したもので、この研究はその後、中国における対日協力政権研究に再びボールを投げ返すことになった。さらに、D. P. Barret & Larry N. Shyu ed. “CHINESE COLLABORATION WITH JAPAN 1932-1945: The Limits of Accommodation” (2001) や Timothy Brook “Collaboration: Japanese Agents and Local Elites in Wartime China” (2005) など、英語圏の研究では、対日協力政権の総体的な研究が進んでいる。日本でも、最近の柴田哲雄『協力・抵抗・沈黙—汪精衛南京政府のイデオロギーに対する比較史的アプローチ』、堀井弘一郎『汪兆銘政権と新国民運動—動員される民衆』(2011)、土屋光芳『「汪兆銘政権」論—比較コラボレーションによる考察』(2011) など、比較歴史学の視点に立った対日協力政権としての汪兆銘政権研究が盛んになりつつある。加えて、従来からの「満洲国」研究、植民地研究に止まらず、「大東亜共栄圏」を構築しようとした東南アジア地域での対日協力の諸相についての検討も、深化しつつある。

汪兆銘や徳王に対して、溥儀や殷汝耕同様「漢奸」・「偽」のレッテルを貼り続けている中国でも、蔡徳金『歴史的怪胎』(1991) に始まった本格的な対日協力政権研究において、いまだイデオロギーからの完全な自由はないものの、潘敏『江蘇日偽基層政権研究 (1937-1945)』(2006) をはじめ、潘健『汪偽政権財政研究』(2009) など、汪政権の内部構造や財政基盤のディテイルを検討するものも現れており、イデオロギッシュな表現とは裏腹に、対日協力政権内部の統治、経済政策とその実態分析など、中国ならではの新たな檔案史料も用いて研究が進みつつある。これは、中国においても「革命史観」の清算、あるいは相

対化が進んでいることの表れかもしれないと、期待させる動きではある。さらに、戦時下東南アジアの日本軍占領統治に関しては、すでにイデオロギーから自由であり、史実の発掘整理が進んでいる。

本特集では、まず石島紀之会員の対日「協力」の諸相―「協力」政権、民衆―によって、日中戦争期を中心に、日本と関わった諸地域の各政権とその統治の有り様を総合的に検討する。続く林英一氏の「東南アジアにおける対日協力と抵抗の諸相―インドネシア・ビルマ・インドの義勇軍の比較―」では、対日協力の諸相に加えて戦後の国家建設との関わりが検討される。さらに関智英会員の「日中戦争前後における日中間交渉の一形態―王子恵と彼を巡る人々―」が、戦後、日本に実質的に亡命することの多かった中国の対日協力政権関係者が、どのように戦中を過ごし、日本との関係を構築したのかを検討する。

いずれも、日中戦争当時の対日協力政権とその周辺について、ナショナリズムを含めイデオロギーから自由な議論を喚起しうる論考である。本特集が、今後の対日協力政権研究はもちろん、日中戦争史研究、さらには近代世界史の再検討への一助となることを念じている。

なお、本特集の元となったシンポジウムは、2014年3月15日にキャンパスプラザ京都で開催された。本特集に掲載された諸論考はそのほとんどが同年夏までに編集委員会に届いていたが、諸般の事情により刊行が大幅に遅れてしまった。関係各位に多大なご迷惑をおかけしたことを心より深くお詫びする。

(編集委員会)